噺

さくたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
噺

【Ｎコード】
Ｎ７１３２Ｌ

【作者名】
さくたん

【あらすじ】
文学少女の二次創作・・・といっても噺の内容はオリジナルです。
元ネタのようにはうまくかけませんが、
書いてみたかったので、作ってみました。
気に入ってくれたら感無量です！

“枯れ草”　“チョーク”　“パリのオギス”（前書き）

これはクラスメイトから出されたお題です。
パリのオギスっていう本が教室にあって・・・
悩んだ挙句、あの2人に任せました。
本編の特別編です。

１０時３０分　学校集合
そして２人は・・・

“枯れ草”　“チョーク”　“パリのオギス”

「あ、ぶどう酒の味ね。」

１２時３０分。僕らは今、飛行機の中だ。

羽田空港から松山空港まで１時間３０分で行けるとは驚いた。

「“パリのオギス”ってつい最近見つけたけど、すてきね！

最初は苦くてクセがあって、けれどだんだんとそれが旨みに変わってくるの。

甘酸っぱいような、深い味わいね。」

「ていうか先輩・・・」

「なに？心葉くん。」

「いつまでトイレにこもって本を食べてるんですか！ずっと待ってるんですよ！」

「あ！ごめん！おなか空いちゃって・・・」

「分かりましたから早く出てください！」

用を足して席へ戻ると、遠子先輩は本を読んでいた。

パリのオギスって知らなかったな・・・

「そういえば心葉くん。昨日のペナルティは？」

「三題噺ですか。ちゃんと作りましたよ。」

僕は原稿を取り出した。

「わーい！！いただきまーす！」

僕は遠子先輩をタオルで隠した。

パリッ　モグモグ・・・

「ん？・・・・！！！！！！！？？？？？」

先輩は、再びトイレに駆け込んだ。

「ケホッ・・・心葉くん！なによこれ～！！」

「えらいむせてましたね。」

「雪が降りしきる中、人々がどんどん殺されていって、雨は血の色に染まって

桜の花びらも血に染まっていって・・・雪は赤くなって、そこから手足のない死体が

うようよと出てきて・・・ってどんなスプラッタよ！

ペペロンチーノにハバネロとタバスコ、ザ・ソースを大量にぶっかけて、

チョークの粉をまぶしたような・・・

うう！！ひどい！！ひどいわ心葉くん！！！」

ペナルティに腹が立った僕は、あえてひどいスプラッタを書いたのだ

・・・ひとつだけは。

「ねぇ、心葉くん・・・」

先輩が、渇ききった声で僕を呼んだ。

「パリって・・・素敵よね・・・

いつか行って・・・みたいわね・・・。」

先輩は期待があふれているような、でも哀しい眼をしていた。

「・・・そうですね。」

僕は、先輩にもう一方の噺を渡した・・・。

あの時から7年、その時はやってきた。

枯れ草が淡い茶色に色づく今、僕はフランスのパリにいる。

小説家になった僕は、新しい小説の素材探しにここに来たのだ。

といっても新しい担当さんの要望が、無理やり押し通されたのだが。

そんな僕の、新しい担当さんは――

“枯れ草” “チョーク” “パリのオギス”（後書き）

フランス行ってみたいです！
もう一方はどんな噺だったんでしょうか？
みなさんの“想像”で・・・

“スニーカー” “消しゴム” “スクランブル交差点” ＋@（前書き）

あらためてつくり直したものです

“スニーカー” “消しゴム” “スクランブル交差点” ＋@

――彼の心は、歓楽や絶望さえも感じないほど、
空っぽになっていた。
わたしは毎日、彼のもとへ訪れた。
もう一度、手をつなぎたかったから。
もう一度、わたしの名前をよんでほしかったから・・・。

「付き合ってください！」
6月の修学旅行の1日目、
彼からの告白だった。
そんな単純な言葉でも、うれしかった。
わたしのような、地味で孤独の似合う女には・・・。
次の日には、彼と一緒に東京の街を歩いた。

おそろいのスニーカーをはいて、スクランブル交差点を
いっしょに歩いた。
流れていく人ごみの中、手をつないだ2人は
決して離れることはなかった。
夢のような時間は、これから始まる・・・・
はずだった。

旅行から帰って数日後、私はテレビを見ていた。
すると・・・「ガーガー！バスン！」
きゃ・・・停電？
テレビの映像は切れ、わかしてたお湯もとまった。
なんだろう・・・？
すごい不気味な音が、外から聞こえた。
１０分後、外に人だかりができていた。
わたしは気になって、様子を見に行った。

すると・・・・「！？」

あの日から、３ヶ月。

彼はあの日から、記憶を失った。

彼の頭の中の消しゴムは、あの夏の思い出を消し去ったのだ。

「・・・ねぇ。わたしの名前覚えた？」

「・・・・・・」

わたしの名前すら、覚えてくれない。

このまま、彼と別れるべきか。

そうしないと、いけない運命なのか。

・・・雨が降り出した。

それは、わたしの心をあらわしているようだ。

悲しみが強くなるほど、雨は強く降り出した。

わたしの涙が・・・彼のやつれたほおに当たった。

ポト・・・

「・・・さみしいの？」

!？　彼の声？

「・・・悲しい・・・の？」

3ヶ月の間、ずっと聞きたかった彼の声・・・。

「僕は何者なのか・・・わかんないし、君の事も・・・

分からない・・・けれど・・・君が毎日来てくれて・・・

気持ちを理解することは・・・・できるんだ・・・。」

「・・・君はどんな気持ち？」

「・・・・・・さびしい。」

・・・え？

「君がいないと・・・さびしい。

君がいてくれると・・・とても楽しい。」

彼の目には、潤った水が・・・

「僕と一緒に・・・いてくれませんか。」

眠られし黄金の時間が、再び動き出した気がした。

“雪” “桜” “雨”（前書き）

僕がまだ三題噺を書きたてのころの作品です。
隆二先輩が好きで好きでたまらないけど
想いが伝えられない女の子
そしてとうとう卒業式・・・
下手ですが、甘い感じにしたつもりです。

“雪”“桜”“雨”

・・・・先輩の温かな手が、全てだった。

雪は、全てを麗しく、きれいに魅せてくれた。

先輩のマフラーにくるまい、肩を寄せ合った日々。

それが、いつまで続くのか。

いや、続かない。続くのは許されない。

春になったら、先輩は卒業してしまうのだから・・・・・。

今日はあいにくの雨。桜が散ってしまう。

桜の樹の下で、見送りたかったのに、

そんなことまで許されないなんて・・・・・・。

胸が苦しい。思いを・・・思いを伝えなきゃ・・・・！

息苦しい。呼吸も荒い・・・・！

こみ上げる思いが、私を苦しめていった。

廊下で、先輩たちの見送りをした。

先輩・・・隆二先輩。

行かないで、お願い・・・・

私から離れないで・・・

もう一度・・・・マフラーの中に・・・・

「なに泣いてるの？」

目を開けると、先輩が私の目頭を、

ひとさし指で拭いていた。

「これ、良かったら食べてね。」

私に菓子袋を渡して、先輩は行ってしまった。

「あ・・・せんぱ・・・」

行っちゃった・・・思いは伝えられなかった・・・

心が締め付けられる。

空しい・・・思いを伝えられずに、

ただただ見送るしかないなんて・・・・

菓子袋を開けると、

少し大きいキャラメルが1個・・・・・

そこには、こう刻まれてあった・・・・。

ダイスキ

窓から光が差し込んだ。

そのキャラメルはほろ苦く、とても甘かった・・・。

“雪”“桜”“雨”（後書き）

なかなか難しいです・・・。

“鳥” “病院” “弓道”（前書き）

これはピーターさんのバトンで書きました。
ちょっとコンセプトを変えてみました。
僕自身書いた中で
かなり好きな作品となりました。
おちゃめで切ないような感じのつもりで。

“鳥” “病院” “弓道”

小鳥のさえずりの響く春、私は矢を放つ先輩を見ていた。
弓道場。とても蒸し暑い、息苦しい空間。
しかし先輩の周りには、澄んだ空気、さわやかな吐息。
先輩に、私の心を射てもらいたいなどと、
くだらない思いをもってたりしていた。
先輩は私を見つけると、にっこりほほえんでくれたね。
私も、思わず顔をほころばせて、
二人で思わず吹き出したね。

二人で学校から、帰る時も、
「鳥は、どうして飛ぶんだろう？」
と私が聞くと、
「きっとその先にあるものにたどり着くためだよ。
人間もいっしょ。その先にあるもののために歩きだすんだ。

でも君が鳥だったら、ドジ踏んで
落っこちちゃいそうだけど。」
「先輩ひどーい！先輩はどうなんですか？」
「僕は・・・どっかよそ見して電柱ぶつかりそう。」
「くすっ・・・先輩もドジですね。」
「君よりはドジじゃないよ。」
「うそだ～。」
「あはは・・・おもしろい。」
こんなたわいのない会話を、たくさんしたよね。
私はずっと先輩といたかった。
ずっと先輩とお話ししたかった。
けれど・・・それも続かないと分かったの。
かなえられない、夢だって・・・。
・・・私は先輩を忘れません。

――私は小鳥になって、その先にあるものを見つけます。

・・・手紙をもう一度読み返してみる。

あの日から1年たつのか・・・

病院に着いたときには、手紙と一本の矢だけ

残されていた。

その矢は、僕がいつかに彼女にあげた、

愛が刻まれた矢だ。

・・・彼女はその先にあるものを見つけられたのだろうか。

彼女の“その先にあるもの”とは・・・？

小鳥のさえずりが、痛ましく、優しく聞こえてくる。

僕の“その先にあるもの”は・・・

僕は手紙に、彼女への愛の矢を突き刺した。

“鳥”“病院”“弓道”（後書き）

ちょっと悲しいかな。
その先にあるものは、ひとそれぞれ違うと思います。
みなさんの、その先にあるものはなんですか？

“スリッパ” “いす” “フェレット”（前書き）

これはクラスメイトからのお題です。
スリッパの使い道はこれしかないと、前々から決めてありました。
設定は、心葉くんと遠子先輩をイメージしました。
でも今まででなかなかの出来かなと僕は思いました。

“スリッパ”　“いす”　“フェレット”

先輩と過ごしたあの部室には
金色の夕陽が差し込んでいた。
光の帯に包まれているこの部屋にいる僕は、
今日この学校を卒業する。

「フェレットってどんな動物だっけ？」
放課後、いつものように先輩と過ごす日々。
二人だけの美術部は、僕にとっては

はた迷惑なだけだった。

「フェレットってイタチ科のハムスターみたいなやつですよ。」

「そうそう！とってもかわいいのよね。」

「そうですね。先輩よりかわいいですよ。」

「ひどーい！！」

パシーン！

「いた！！スリッパではたかないでください！！」

「もう！！デリカシーがないんだから！！」

「いやいや。女の子がスリッパでなぐるほうもどうかと・・・。」

「うるさーーい！！」

パシーン！

先輩を思い出すと、今でも頬がズキズキする。

一体何回はたかれたことだろう。

結局先輩は、フェレットを書いたのか？

でも先輩のフェレット、ひどそうだな・・・。

「もう！！またわたしをバカにしてる！！」

え！？先輩！？

・・・周りにはだれもいない。

気のせいか・・・。

彼女はいまなにをしているのだろう？

彼女は僕に何も言わず、頬にキスして去っていった。

部室には、金色の光に照らされた

２つのいすが整っていた。

・・・会いたい。

もう一度、先輩と絵を描きたい。

もう一度、先輩と話したい。

そんなことを思っている自分に、思わず苦笑いした。

ふと気がつくと、作業机の上に

一枚の紙と額縁に飾られた絵が置いてあった。

「卒業祝い」

その絵は、僕と先輩とフェレットの3ショットだった。

無邪気な笑顔の先輩と、無頓着な僕。

フェレットは、とても意気揚々としていた。

まるで・・・絵の中に住んでいるようだ・・・

先輩・・・いつのまに・・・

絵の先輩の頬に、涙がにじんでいた。

〜P・S〜

卒業おめでとう。　先輩より

“スリッパ” “いす” “フェレット”（後書き）

クラスメイトがかなり
気に入ってくれました。

"水”　“未来”　“空”（前書き）

ホエーさんからのバトンです。
ちょうど父の日に作ったのでそれにちなんで書きました。
竹田　千愛をイメージしました。
文学少女のなかで一番すきなキャラなので。

"水”　“未来”　“空”

――わたしには、人の痛みなど、分からない。
それは自分が空っぽの道化なのだから。
面白い話も、なにも楽しく感じない。
ペットが死んでも、なにも悲しくない。
だから曇り空の日、お父さんが入院したと聞いても、
なんの衝撃も感じなかった。

わたしの父さんは、手足に力が入らなくなってしまった。
握力はわたしよりも弱かったし、

歩き方も、ロボットのようにぎこちない。
今は順調にリハビリも進んで、
土日は家に外泊している。
６月１９日、今日がその日だ。

「ただいま～」
とてもさわやかな笑顔だった。
ぎこちない歩き方も、だんだんしゃんとしてきた。
「おかえり」
わたしも、道化を隠して笑顔で答える。
父さんは帰ったら、自分の体の状況について語った。
少しずつ握力が戻ってきたこと、

ボールを持てるようになったこと、
病院食の話など、楽しそうに話していた。
わたしが、チョコをほおばっているとき、
「チョコを食べてる姿をみると、
家に帰ったなぁと思ったよ。」
と笑いながら言った。
どうしてだろう・・・
なぜ辛い病気にかかっても、
こんなに笑顔でいられるんだろう？
道化の心が、重い鉛で締め付けられたように感じた・・・。

わたしは、父さんになんの感情も持てない。
それを知っていても、わたしに笑顔で話してくれる。
時には真剣に向かい合い、
時には冗談を言ったり、
わたしを元気づけようと、精一杯だった。
でもわたしは、なんの期待にも応えられなかった。
そんな中、父さんは病気に苦しんでいる。
痛い、辛いと嘆いている。
それでもわたしに、笑顔で接してくれる。
どうして・・・？
・・・わたしになにかできることがあったら・・・
空っぽのわたしでも、できることは・・・
６月２０日、明日は父の日・・・
・・・わたしは、使っていない新品のペンを取り出し、

白いリボンを巻き、父さんの部屋の鉛筆立てに、
そっと忍ばせた。
リボンに、言葉を刻みつける。
そのとき、わたしの目に水があふれだした。
一滴ずつ、一滴ずつ・・・

――父さん、わたしの思いが届きますか？
わたしは、これから険しい道を歩き始めます。
父さん、これからもわたしの未来を
見守っていてくれますか・・・？

リボンには、こう刻みつけた。

「ありがとう　そして　お大事に」

"水”　“未来”　“空”（後書き）

みなさんも、
両親に感謝をしてみては？

“画鋲” “カメラ” “ライトノベル”（前書き）

これはチャットで15分で作った“超駄作”です。
15分では、なかなか難しいです・・・。
しまりが悪いので、浅いな～と思いました。

“画鋲” “カメラ” “ライトノベル”

「おい、ぼやけてんじゃん。」

友人は、僕の撮った写真を、しげしげと眺めている。

この新聞部で、様々なテーマが書かれた紙が

部室の壁に画鋲で貼り付けられてる。

その中でも、特に女子の髪型について追求されている。

・・・もう意味わかんない。

やる気が失せるわ・・・大丈夫かこいつら。

そう思って、撮った写真をもう一度見直していると、

ひそかに想っている彼女の後ろ姿の写真があった。

手には・・・本？

いやライトノベルか・・・

！！俺もその本を読んでいる！

なんとか話しかけられないかな？

でも・・・

「どうした？」

「いや・・・」

「あ！この子好きなんだ～」

「ば！ばか！・・・でもまあ好き・・・だな。」

友人はニヤニヤしている。嫌な予感・・・

翌日、昼放課のとき

「あ・・・あの・・・・」

話しかけてきたのは、写真の彼女だ。

「この写真・・・新聞部が・・・・」

彼女は、僕が同じライトノベルを惚けながら読んでいる写真を差し出してきた。

あいつら・・・

「この本、おもしろいですよね。」

彼女の頬は、少し赤かった。

部活の時間に、友人の寝顔をこっそりカメラで

とってやった。

彼の、片思いの人に届けるために。

“画鋲” “カメラ” “ライトノベル”（後書き）

う～ん・・・やっぱり展開が早すぎましたかね？
本編では、どんな感じで出そうか・・・？

“星” “三角形” “心”（前書き）

ｓｕｐｅｒｃｅｌｌの「君の知らない物語」のリスペクト三題噺です。

七夕シーズンに書いたので・・・

楽しく、元気が出るような、切ない感じで。

“星” “三角形” “心”

「今から、星を見に行こう。」

リーダーは立ち上がって、そう言った。

私たちが属している、バトミントンサークルは、

男女あわせて8人という、少数精鋭だ。

「おお、たまにはいいこと言うじゃん。」

「ばーか。いつもだろ。」

私たちは笑った。それもいつものことだった。

「とりあえずさ、高台まで自転車で競争だ！」

「リーダー、きついよ～。」

「いいの！負けたらジュースおごりだ！」

「畜生！やってやる！」

「女の子だからって油断しないでよ！」

私も後に続いてこういった。

「リーダーにおごらせる！」

「マジかよ・・・。」

「自業自得。言いだしっぺなんだから。」

「はいはい、買ってきますよ。」

負けたリーダーは、とぼとぼとジュースを買いにいった。

「それにしても・・・きれいね。」

私は感動した。こんなに夜空がきれいだなんて・・・。

「空気もいいし、ひんやりして気持ちいい・・・

リーダーに感謝しないとな。」

「まあ、ジュースで自爆したけどな。」

また笑いがおこる。私も笑った。

ただ・・・どこかぎこちなくなっていたかも。

いつからだろう、リーダーのこと、

笑った顔

怒った顔

優しい顔

泣きそうな顔も、

いつのまにか、好きになっていた。

ただ、彼は知らない。

だれも私の心は分からない。

これは、私だけの物語・・・

「今は夏の大三角形だよな。

あれがデネブ、アルタイル、そしてベガ・・・

あれが天の川だ。」

「うぉ！リーダーいつのまに！」

「お前らが星にみとれているからだよ。」

「あれ？ジュース一本だけ？」

「金がないんだよ・・・・。」

「あ、じゃあ・・・

お前の好きな人に、ジュース渡せよ。」

・・・え？

「うわ！なにそのルール！まじないわ。」

「いいから、早く渡せよ。」

「えぇ～・・・」

リーダーは困り果てている。どうしよう・・・

私の想いが届くはずがない。

もう覚悟の上。

リーダー、あなたは誰を想っていますか？

あれから八年。私は結婚して、主婦となった。

久々に、あの夜を思い出していた。

・・・と、メールが入った。夫からだ。

「今夜、星を見に行こう。」

あの夜と同じ日・・・

「うん、待ってるよ。早く帰ってきてね。」

私は今も持っている、

あのジュースの缶を・・・。

“星”“三角形”“心”（後書き）

最近、いい三題噺をかけません。
スランプかな？まあ今までのも駄作なのですが。

“花火” “イヤホン” “水筒”（前書き）

現実味のある話がいいとクラスメイトに言われたため、
製作してみました。
不覚にも、自分で作って泣きそうになりました。
悲しい、としかいいようのない作品です。

“花火”　“イヤホン”　“水筒”

8月7日、この日の夜に人々は有名人が来たかのように集まってくる。

年に1度の花火大会の日。

そして、デートにはうってつけのその日、

僕は彼女と花火大会へと足を運んだ。

――「わー、かわいい！」

彼女は花柄の水筒を欲しそうに見つめている。

彼女は同級生で、気さくな人だ。

同じ高校の剣道部で、僕が試合で負けて、悔しくて悔しくて、

涙を流して泣いていた時、

「ほら、泣かない。心を無にして、乱しちゃだめ。

これから、うれしいことなんてたくさん舞い込んでくるんだから。」

と見ず知らずの僕を慰めてくれた。それが出会いだった。

「その水筒欲しい？買ってあげようか？」

「え！いいの！？ありがと～。」

「どういたしまして。あ、あと金魚すくいでもやるか。」

「うん！やるやる！」

彼女は、僕のことが好きなのだろうか？

僕は・・・大好きだ。けれど・・・

実は昔、付き合っていた人がいた。

大好きで大好きでたまらなかった。けれど・・・

「あいつ、私をストーキングしてるっぽくて、なんとか別れられないかな～。」

ある日の放課後、その子の友達と話しているのを聞いてしまった。

僕の心は、窓ガラスが落ちたかのように、砕け散った。

そんな覚え一切ない！ただただ君のことが好きだっただけだ！

なぜだなぜだ！！好きになって何が悪い！

好きになって、どうして避けられなければならないんだ！

畜生・・・畜生！畜生！

僕はあれから3日も学校へ出ず、こう決めた。

「もう人を好きにならない。」と・・・

それが今ではこれだ。

どういうことだよ、自分。

隣には、とても満足そうな彼女の顔・・・

僕も取り繕った笑顔で、彼女と接する。

片方の耳につけたイヤホンからは、僕の一番好きな曲の「うたかた花火」が流れてきた。

『君のこと嫌いになれたらいいのに・・・』

訴えるような、悲痛なささやき。

それが自分の、切実なる願いだ。

『もう忘れよう　君の事全部』

それがもし本当にできたのなら・・・

パーン！！

「うわぁ！花火だぁ！」

本当になんの前触れもなく、不意に一発の花火が上がった。

その光景が・・・とてもきれいで・・・

僕なんて、穢れたものでしかないと・・・追い詰められた。

僕は泣き崩れてしまった。彼女の足元で。

「え！？どうして泣きだしちゃったの！？」

「うぅ・・・僕は・・・もう人を好きにならないって決めたのに・・・

好きになると・・・ぐすっ、どこかに消えて行っちゃうから・・・

なのに・・・君が好きで好きで、たまらない、でもどうしようもない・・・

だから・・・どうしたら嫌いになれるかって、君の事を突き放せる

かって・・・

そんな・・そんな情けない自分が憎くてたまらない・・・・。」

もう、ひざまづくしかなかった。

僕の罪を、彼女に懺悔するように。

「私は・・・君が嫌ってもいい、突き放してもどうだっていい。

君が私を思う気持ちは、変わらないから、私はきみのことが好きなの。」

初めて出会ったときの、澄んだ、優しい声・・・

僕の恋は、許されるものなのだろうか。

空には、たくさんの花火が打ち上げられていた。

「・・・どうか僕を・・・見捨てないでください。」

絞りだした声で、そう訴えた。

“花火” “イヤホン” “水筒”（後書き）

またｓｕｐｅｒｃｅｌｌ使ってしまいました。
とてもこの噺と合っていたので・・・。

“コアラ” “怪力” “ショベルカー”（前書き）

おひさしぶりです。
これはわたしの友達が書いた作品です。
僕はわりと好きですけど…
クラスでは不評でしたね。
これは僕が、形は変えず、細かい編集をしたものです。

“コアラ”　“怪力”　“ショベルカー”

もう枯れ葉が地面を覆う頃、

入り口には、まっ黄色のショベルカーが停まっていた。

私は部活の後輩である、彼氏と動物園に来ていた。

彼はコアラみたいにかわいい顔で、少し女の子っぽい。

それがほんとにかわいくてかわいくて！

私たちは木の葉が降りかかっているベンチに、

バサッ　バサッと木の葉をよけて、一休みした。

「先輩、おなか空きましたよ。」

「そっか～。じゃあこれでも食べる？」

私は枯れ葉を両手に盛った。

「・・・え？これをどうしろと・・・」

「えぃ！」

と、わたしはいたずらっぽく、というかいたずらで彼の頭上に木の葉を舞い上げた。

「えへっ。」

「えへっじゃないですよ、もぅ～。」

彼は迷惑そうに頭にのった葉を落としていた。

あぁ～ほんとにかわいい！

「しょうがないなぁ～、ほいほい。」

「あ、ありがとう・・・ございま・・・でも痛いです！」

葉を落とすのを手伝ったんだけど、初デートのせいか、見えない緊張のせいで

力が強く入ってしまった。

「あーあー、ごめんごめん。」

「でも先輩のそういうところ、かわいいですよね。」

「！！もう！恥ずかしいこと言わないの！」

バシバシ！

「痛い！痛いです！でもいいじゃないですか、彼氏にこんなこと言

われちゃって。」

「デリカシーがないよ！」

バスッ！

あ・・・勢いでローキックしたら、彼のみぞおちにインしちゃった・・・

「あっ、ごっごめん！」

「うう・・・大丈夫です。でも相変わらず力強いです・・・。」

私のコンプレックスの怪力で、何度彼を殴ったことか・・・

反省してるんだけどな・・・

「あの・・・痛かった？」

「うう・・・もう慣れちゃいました。先輩手加減してるんじゃないですか？」

「ひどい！心配してあげたのに！また蹴るぞー！」

「あはは、やめてくださ～い！」

タッタッタ・・・私と彼の追いかけっこ・・・

ああ、なんて幸せな・・・！

ズシャ！

「せ・・・せんぱい？」

すごい情けない、転び方しちゃった・・・

見られるの、すごい恥ずかしい・・・

「先輩！」

私の目の前には彼の手が差し伸べられていた。

「ありがとっ」

彼のあたたかな手でなんとか起き上がることができた。

「ふぅ」

トントン・・・

「なに？」

後ろに振り向いた瞬間・・・私の唇にやわらかく、あたたかいものがやさしく当たっていることに気付いた。

「ふぇ！？」

「先輩、ほっぺ真っ赤になってますよ～。」

―やられた。私からいつかキスをしてやろうと思っていたのに・・・・

いたずらっぽく笑う彼に、私は心の中でこう誓った。

今度は私から、絶対にキスをしてやる！

“コアラ” “怪力” “ショベルカー”（後書き）

この友達の好きな女の子のタイプが
さらけ出されていましたね～。

“電柱” “番長” “扇風機”（前書き）

番長と聞いてなんだろうと思って、
やっぱり不器用でも優しいかな、という印象がありました。
今回の番長は、カリスマでもやっぱり辛いときがあるという
人物でしょうか。
今回は身近なテーマで、“掃除”です。

“電柱” “番長” “扇風機”

「うわぁ…汚い。」

しばらくほったらかしにしておいた自分の部屋。床には教科書やぬいぐるみ、

たくさんのものであふれていた。まさしく女子大生の典型的な部屋、だった。

「さすがにお母さんが怒るのも分かるな…。」

まず、季節外れの小さい扇風機を棚にしまい、どう片付けようか思案した。

「ええと、まずは一旦外に物を全て出してみる、そこでいるものいらないもの仕分けて、それから…」

すると、中学校のときの記憶が突然よみがえった。彼のこと…

みんなから「掃除番長」と呼ばれていた、あの子…。

「おい！隅っこのホコリ残っているぞ！あとぬれぶきで吹いたところはしっかりからぶきして、
乾燥させて！もう時間ないぞ！机を運ぶ時はひきずるなよ。」
これは先生の指導ではない。とある男子生徒の指示だった。
玉川大紀（たまがわ だいき）。皆は彼を「掃除番長」と呼んでいる。
彼は勉強できないし問題ばっかりおこす、けど掃除に命をかけ、
いつもきれいにするように心がける、変わった不良生徒だ。
そんな彼に反発する生徒もいるが、彼の信念と強さ、
そして掃除魂にあこがれ、ついてくる生徒もいる。
さらには先生でえさえ、彼から掃除の心得を学んでいる、
この学校、いや地域で知らない人はいないほどの有名人だった。
彼と同じ掃除場所になったら、怒鳴り散らかされるけれど、きれいになる。
けれど、もちろん掃除がめんどくさいという人も多数。特に男子が多いわけで、反発グループも多い。
しかも彼の派閥以上に。
冷戦状態が続いている中、わたしは中学2年のとき、彼と同じ掃除場所についたのだった。

わたしは掃除は嫌いではなかった。むしろ好きだった。
よくおばあちゃんを手伝っていたこともあるからだろう。
よくおばあちゃんに、
「家をきれいにすることは、心をきれいにすることなんだよ。掃除をすれば、きれいな心も、
きれいな顔も手に入れられるよ。」
といわれ、毎日のようにおばあちゃんを手伝った。

理科室で、わたしはぞうきんを2枚持って、床をふいた。
ひとつはぬれぶき、もうひとつはからぶきで、まずは汚れがあるところをぬれぶきでこすっておとし、
からぶきで水分をのばし、自然乾燥を待つ。乾燥は自然がいちばんとよくおばあちゃんに言われた。
「勇次！黒板の粉はまずトイレットペーパーでおおまかにふき取ってから、
ぬれぶきをすることを勧めるぞ。ぞうきんも、あまり汚してはだめだからな。」

「ありがとうございます！」

なるほど、ぞうきんも大切にするのね…。ぞうきんは汚すものと思っていたけれど、

汚くなると汚れが取りづらくなるし、新しいものに変えても資源が無駄になる…

そういう考え方もあるのかなと思った。

この日の掃除の時間は終わり、わたしは教室へ戻った。

下校、いつもの友達と別れ、家まであと少しというところ…

「君、ちょっとまって！」

誰かに呼び止められ、振り向いたら…あの玉川大紀くんだった。

「今日の掃除、すごいよかったぜ！こんなにまじめに掃除してくれる人…久しぶりだな。」

「そ…そうなんだ。」

そんなにまじめだったのかな…？ほめられて悪い気はしなかった。

掃除番長にほめられた人は、そうそういないらしい。

「わたしの…どこがよかったの？」
「女子で、率先してぞうきんを取りに行くなんてなかなかない。それに手際も手順もよかったよ。
あ、俺は玉川大紀。君は？」
「わ、わたしは…吉岡（よしおか）　佐織（さおり）…。」
「さおりちゃんか。これからがんばろうぜ！」
「う、うん！」
背が高くて、少しやせててつり目の大紀くんの笑顔は、無邪気な少年のように、かわいらしかった。

たしかにわたしはまじめだったのかもしれない。
おばあちゃんは、わたしが中学校に入ってすぐに死んでしまった。
おばあちゃんは、私が死んでも、家の掃除しっかりやってあげてね。と言い残した。
もちろんおばあちゃんがいなくなったときはとても悲しかったし、そのぶん掃除してあげようと強く思った。
大紀くんはいつも以上にがんばっていたし、わたしも彼とがんばっ

ていた。
時にはわたしも友達に手順を教えてあげたりして、いつのまにか「掃除秘書」という
名誉がつけられてしまった。
わたしはよく大紀くんと話すようになり、彼の優しさ、心の強さに教訓になることがたくさんあった。
けれどある日、。反対派閥が大紀くんに攻撃したのだ。

「玉川大紀よぉ。最近女とつるんでいるらしいな。」
「知らねえな、誰のことだ？」
「とぼけんなよ。吉岡佐織だよ、べっぴんさんだよな。」
「あいつは、てめえらとは違って掃除をまじめにやってくれるいいやつだ。
それともあれか。羨ましいのかぁ？」
「悪いな…今日はおまえ一人だ。みんなおまえを使って弄びてえんだよ！」

「校内で暴力事件発生！玉川大紀重傷！」

そのニュースは全校に轟いた。

けれど、またあいつか、アイツ先に手をだしたんだろどうせ、とか誰もが大紀くんが悪いと決め付けていた。それもそうだ。彼は結局不良だ。

でもわたしは、彼の味方でありたかった。とにかく保健室へ向かった。

「大紀くん、大丈夫？」

「さおりちゃん…？すまねぇ、こんな不甲斐ない姿で…俺は不良といっても喧嘩は強くねぇんだ。」

「喧嘩が強くなくたっていいよ。掃除では強いんだから。」

「俺は…もともと不良でもなかったし、掃除もめんどくさくてやってなかった…

そういえば言ってなかったな。どうしてこんなにも掃除に厳しいのか…。」

「それは…気になってたよ。」

「俺は、ほんとうに最低だった…。」

俺は貧乏で、ろくでもないアパートに住んでいた。父親はいなくて、母親といっしょに住んでいた。

部屋の環境は、ほんとうに最悪だった。

よく母ちゃんに、掃除しておいてね、と言われたけど、めんどくさくてやってなかった。

そんなある日、母ちゃんは死んだんだ…「シックハウス症候群」で。

猛烈に後悔した。俺が掃除してやれば…母ちゃんは死なずにすんだんだ。

悔しくて、ただただ悔しくて、死んでしまいたかった！

けれど、当時の担任の先生に、こういわれたんだ。

「君はこれからお母さんのために、掃除を一生懸命やりなさい。それを友達にも勧めなさい。

決してその信念を捨てちゃだめだ。君のお母さんは、見守っていてくれるから…。」

それから俺は、掃除に厳しくなった。まわりからなにを言われようと、信念は変えなかった。

どんなに、悪へと走ろうとも…。

「そう…だったの。」

「だから俺はあきらめないし、こんな怪我どうってことない。いちばん辛いのは、
掃除を一生懸命やることはばかばかしいと思っている人がいることだ。それがいちばん辛い…！
こう不甲斐ないことになるなんて、悔しすぎる…！」

彼も、大切な人をなくしていたんだ。しかも、自分の責任がのししかかっている、

とても辛いものだった。

でも…わたしも…なにかを言うべきだった。

「わたしも…おばあちゃん亡くして、それからずっと掃除がんばってきたの。
人に自分の考えを浸透させるのは、難しいけれど、一人でも多く自分に共感してくれるって、
幸せだと思うの。大紀くんに味方をしてくれる人は他にもたくさんいるから、みんなで協力しよう！
君はひとりじゃないんだから！」

自分にこんな考えが持てるようになったのも、彼のおかげだから、
今は彼を励ましてあげる、
それがわたしが出来ることの一つ。わたしにしかできない、秘書だからこそできること。
彼は頬に涙を流し、笑顔で「ありがとう」と言ってくれた。

それが今ではこの有様。この状況を彼に見られたら、悲しむだろうなぁ…。
もう3分の2が片付いて、しばらく一休みをした。
日は沈みかけ、電柱の影は短く地面に置かれていた。今だから思えることは、
わたしは彼に惹かれていたのかもしれない。あれから、大紀くんの無実が証明され、

学校側は掃除についての様々なルールを決めた。その結果、「掃除がいちばん上手な学校」として

有名になった。

彼は今どこでなにをしているのだろう？と同時に、母校へ足を訪れたくなったな。

そして部屋の片付けを再開した。

次の日、母校を訪れた。外観も変わらず、相変わらず古い学校だなと思った。

もう生徒はいない理科室、あの頃に帰ったように、ぞうきんを持ってみた。

最近家の掃除もやれていない気がする。今度ひさしぶりにやってみよう。

わたしはあの頃に帰ったように、床をふいてみた。ぬれぶきとからぶきを持って、

床の汚れをとってから、からぶきで水分をのばす…

「そんなことより、まずはほうきからごみを掃くべきだって。」

驚いた。彼はこの学校の教育実習生だった。

「久しぶりだね、さおりちゃん。」

“電柱” “番長” “扇風機”（後書き）

みなさん掃除はちゃんとやっていますか？
僕は学校でトイレ掃除がんばっています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7132l/

噺

2011年1月20日17時38分発行